

10月事業予定

3日 6街区協議会理事会 22日 常務会

16日 防災説明会 24日 正副会

9月末日現在組合員総数 261社

7日 小松商店加入

10月末現在組合員総数 262社（予定）

うおいの11月の商品情報を【東京魚市場買参協同組合】のホームページに掲載いたしました。

【さかなの動き】タコ 西アフリカ漁振るわず
内販、コスト上昇重しに (10月15日みなと新聞)

西アフリカのマダコ漁は前年並みのペースで国内への搬入が続いている。商社筋によると、夏漁の漁獲も前年並みだが平年と比べると大幅に少なく、価格やコストの上昇で厳しい状況が続いているという。商社筋によると、モーリタニアつぼ漁の主産地・ヌアディブでは7～8月末までの生産量が3400トンと前年同期より900トン上回ったものの2022年と比べて大幅減。一方のトロール漁の水揚げは多くはないという。モロッコでは夏漁全体の漁獲枠が前年比2割増だが、ダクラの水揚げは多くはないという。一方のトロール船は「8月以降は順調で昨年よりは漁獲が良いようだ」と商社筋は期待する。モーリタニア水産物通商協会（SMCP）はこのほど、11月11日までの冷凍タコ対日価格（トン値、FOB、口銭別途）を公表し、前回（9月まで）の価格から高値の据え置きとなった。一方で為替相場は再び円安が進行しており、商社筋は「物流費などのコスト上昇で価格は前年以上。在庫の消化が進み夏漁の原料だけになれば末端の値上げは避けられない。年末商戦は一定の需要はあるものの、年明け以降は販売数量は確実に落ち込むだろう」と懸念する。

【産地市況養殖】養殖ブリ900円で動き無し
鹿児島産 (10月15日みなと新聞)

鹿児島県内の養殖ブリ主要産地の中心浜値は今月上旬、前年同月と同額のキロ900円（中心サイズ3・5キロ）で推移。8月から動きがない。販売状況は「先月と同様、1尾サイズが小さく販売可能な尾数が限られている。例年より販売が鈍い」（産地筋）。現在池については「赤潮による餌止めの影響から計画より1～2カ月分ほど遅い。これからの成長に期待する」（同）。県内の他産地では関係者が「赤潮を免れた地区も夏場の餌の“食いつき”の悪さから成長が予定より遅い。生産者にもよるが、今期は県全域が成長不足傾向」と話す。

【産地市況養殖】養殖マダイ保合い930円
愛媛産 (10月15日みなと新聞)

愛媛県産養殖マダイの10月初旬の産地相場は、ほぼオールサイズでキロ930円。相場は保合いで当面、現在の相場を維持するとみられている。愛媛県漁協の担当者は「養殖マダイの相場は、前月と変わっていない。相場は保合い。」

(右欄上に続きます)

【訃報】阿天坊取締役会長 阿天坊房吉氏、
10月17日逝去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

(左欄下の続きです)

大サイズが少なくなっている。消費の動きは良くない」と話す。一方、養殖マダイの8月の韓国向け輸出量は前年同月比15・8%増の446トン。金額は13・9%増の4億3989万円。平均単価は17円安の987円だった。今年の韓国向け輸出数量は4月に初めて前年同月の実績を上回った。6月からは3カ月連続の2桁増。4月から月間400～500トンの輸出が続いている。1～8月累計でみると、数量が前年同期比9・7%減の3287トン、金額は8・3%減の33億1927万円。

【産地市況養殖】養殖カンパチ50円値上げ
1600円 鹿児島産 (10月15日みなと新聞)

鹿児島県の養殖カンパチ主要産地の基準浜値は10月、前年同月比キロ150円高の1600円（中心サイズ3・5キロ）で前月から50円値を上げた。浜値は2022年9月以降、1400円超の高値相場が継続する。販売について産地筋は「需要に対し在池量が少なく、販売をある程度抑制。夏場の高水温から餌食いが悪く1尾サイズはいまだ小さめ。餌価格の高さからむやみに給餌するわけにもいかない」。他県では大規模な赤潮から、カンパチがへい死した地区があるが「当地区は幸いにも発生なし」（産地筋）。

【消費地市況養殖】豊洲市場養殖ブリ、天然物と競合
成育遅く3～4キロ中心 (10月15日みなと新聞)

10月上旬、東京・豊洲市場における養殖ブリの中心卸値は前年同期並みのキロ1100～1050円で推移する。入荷ペースは前年並み。高水温や飼料費が高いことなどを背景に成育が例年よりも遅く、サイズは1尾3～4キロが中心。競合する天然物について卸は「北海道産の1尾8～9キロサイズが850～800円の卸値で出ている他、ワラササイズはさらに安い。養殖物から切り替える量販店が出る値差だ」と指摘する。養殖カンパチの中心卸値は1～2割高の1900～1800円だった。入荷ペースは2～3割減の水準という。卸は「現在の出荷サイズはほぼ2キロ台。年末にかけては玉の確保が課題になるだろう」と見込む。養殖マダイの中心卸値は1割安のキロ1000円だった。前月並みで推移した。入荷ペースは1割減であるものの、卸は中旬以降の動きについて「天然物が減る中、相対的に養殖物の引き合いが増す。ある程度は良くなるのでは」と期待する。

(次頁左欄上に続きます)

【豊洲の旬】生鮮サンマ 好調な売れ行きも、後半戦の小型懸念

(10月16日水産経済新聞)

公海での操業が続くサンマは、水揚げが途切れることなく、サイズも100グラム以上が安定して上場。量販店・スーパーでも扱いやすい規格で、買い気は好調だ。一方、今後の小型予測を案ずる声も聞こえている。東京都中央卸売市場の週間市況によると、一日平均上場数量は、10月1週目に53・3トン(昨年同期比42・8%増、一昨年比7・5%増)と増加。相場も中値キロ680円と、落ち着いた。卸担当者によると、「中心サイズは日によって前後するが、4キロ35～38入りと鮮魚向けの100グラム上」「9月の量販店・スーパーの勢いも落ち着き、相場に値頃感が出てきた」と、供給が需要を上回る兆しをみせつつある。それでも、秋の主力商材であり「そのまま店先に並べられる」「脂がまだ強いとは言えないこともあるが、同サイズの魚の中では持ちもよい」と、重宝される理由を話す。現在(10日時点)はロシア水域でも操業が可能となり一部漁もみられたが、「似たような品質」だったことから、リスク回避の思惑もあり、公海枠が埋まるまでは公海での操業が中心となる。ただ、水産研究・教育機構の2024年度サンマ長期漁海況予報によると、10月後半からの小型化が予測されており、今後を不安視する声が上がっている。

【さかなの動き】チリ産ギンザケ 内販1080で保合い4/6が為替動向に注目集まる

(10月17日みなと新聞)

10月上旬現在、チリ産ギンザケ(冷凍ドレス)の内販価格は前月上旬並みで推移した。内販価格は4/6ポンドサイズでキロ1080円、6/9ポンドサイズで1050円になった。商社は「9月末に現行よりも20円安い価格だった時期があったものの、為替相場が円安に振れたことにより戻った」と補足した。財務省令で定める外国為替相場(課税価格の換算)は一時1ドル=160円台の円安になっていたものの、9月22～28日は142・3円、9月29日～10月5日は142・12円まで円高が進行。一方、足元の10月6～12日は144・25円、同13～19日は144・86円と再び円安に振れ、今後の動向に注目が集まっている。10月上旬現在、現地側は4/6ポンドで7・3～7・2ドル、6/9ポンドで7ドルの価格を唱えている。商社は6/9ポンドの現地価格について「10月ぐらいから水揚量が増える中、価格が上がるとは考えにくい」と指摘する。チリ水産庁が発表した過去5年の月別水揚量をみると、10月は年間水揚量の16～18%、10～12月は半分以上を占めてきた。一方、商社は「アジア向けが6・9～6・8ドルで動いていると聞く。大幅に下がるとも考えにくい」と説明する。

【さかなの動き】冷凍スルメイカ類 ペルーアメアカ漁低調 現地相場上昇基調

(10月16日みなと新聞)

商社筋によると、ペルーの1～7月のアメリカオオアカイカ(アメアカ)水揚量は14万5411トンだった。水揚量には波があり、昨年上半期は豊漁となったことから、前年1～7月と比較し70%減となった。ただ、低調な漁模様が続く中、現地の原料価格は上昇基調にある。チリの排他的経済水域(EEZ)内でのアメアカ漁は例年10万トン前後を水揚げするが、今年は約8万5000トン前後となった。商社筋は、今後ペルーで漁模様の回復の兆しが見られない場合、来年1～2月に新漁が始まるチリ産原料を求める動きが強まるとみる。中国では現在、スルメイカの代替となるアルゼンチンマツイカの相場が上昇している。台湾船によるフォークランド諸島での豊漁を受けて6～7月は相場を下げたが、中国によるスルメイカ新漁が振るわず「原料相場が高値に戻った」(商社筋)。また、9月下旬時点の同国内での小型アメアカ(赤道イカ)原料相場は前月に続き高値水準に。「1～2キロ、2～4キロサイズは在庫が少ない」(同)財務省貿易統計によると、1～8月の冷凍スルメイカ類(マツイカ類、南米アカイカ類など含む)輸入量は前年同期比1%減の5万9130トン。

(右欄上に続きます)

養殖ブリ 量安定も浜値安

成長遅れも潤沢、価格にもお得感 (10月17日みなと新聞)

今期の養殖ブリは昨年同様、在池量が潤沢。価格も量販店や料理店のメニューとして採用しやすい相場。需要者からみた浜値は比較的安価で「お得感」が強い。同魚は比較的安定した価格と生産量から「安定販売可能な魚」(業務筋)と評価され、国内養魚の主力となった経緯がある。ある量販店バイヤーは同魚を「今冬に向け、最も販売採用しやすい魚の一つ。産地加工体制も万全で人員不足で苦しむ小売業界に最適だ」と評価する。最大産地、鹿児島県の主要産地では「夏に大規模な赤潮があったが、被害は最小限にとどめた」と産地筋。現在の在池については「赤潮対策の餌止めと夏季の高水温による餌食いの悪さから成長が遅れている。求められる販売サイズに達するのは年末近くになる」。来期については「種苗採捕量は十分。安定した供給量となる見込みで『安定の養ブリ』が継続する見通し」。また、国内主要産地では、人工種苗採用をさらに拡大する動きが活発化。

(次頁左欄上に続きます)

種苗改良から成長が速く、病気や水温変化にも強い新たな種苗出現も期待できるなど“さらなる安定の養ブリ”に向けた活動が進行している。一方、養ブリ浜値の指針となる同県主要産地の中心浜値は今月中旬、前年同月と同額のキロ900円（中心サイズ3・5キロ）と安定の安値推移。しかし漁家経営面では「経費高騰の折、浜値弱含みは痛手。販売が安定すれば浜値はやがて適正值に落ち着くと期待する。まずは販売を波に乗せたい」と産地筋は話す。

養殖カンパチ 減産悩む生産者

池入れ少なく、需要に対し供給縮小 (10月17日みなと新聞)

養殖カンパチは今期、池入れ尾数の少なさから需要に対する供給量が少なく、産地は年間を通じた販売の維持のため供給を抑制する傾向が強い。今夏は、九州地区で大規模な赤潮で多くの養カンパチがへい死。猛暑による漁場の海水温上昇から在池魚の成長が大幅に遅れるなど、今期販売計画に大きな狂いが生じている。近年、種苗確保がブリと比べ困難なカンパチは、将来に向けた生産の維持に不安を持つ生産者が少なくない。これに加え今期は、赤潮と高海水温が追い打ちをかけた形だ。同主要産地は過去、浜値の激しい乱高下と生産尾数の大きな増減を経験。「不安定な魚種」として取引が減少した経験を持つ。「今期浜値は高値ながら安定傾向。今年が必要とされる1尾サイズを供給できるよう専念したい」と産地筋は話す。

養殖その他ブリ類 ヒラマサ軸、ブリヒラ脚光

(10月17日みなと新聞)

ヒラマサを軸にブリやカンパチ以外の“その他ブリ類”が長崎県や大分県など主に西日本地区で養殖されている。2023年の生産量はブリ類中、1割未満の4300トンとなっている。ヒラマサはブリより高温を好み、特に海面温度上昇が心配される西日本で注目されている。料理ではブリより脂が薄くさっぱりした食味。歯応えもあり、国内では高級食材として扱われる。刺身や寿司他、焼き魚、煮魚、酢の物などブリやカンパチ同様多様な調味に対応するまたブリとヒラマサを交配した「ブリヒラ」にも注目。ブリの脂のりの良さとヒラマサの食感を併せ持ち、高海水温に耐え寄生虫も付きにくい。ブリヒラは自然界でもまれに誕生するが、国内では近畿大が人工種苗を開発。今後の販売拡大に期待が集まる。

(右欄上に続きます)

【こちら漁況情報部】生鮮サンマ水温低下南下傾向

9月漁6割増 9500ト

(10月18日みなと新聞)

漁業情報サービスセンターによると、9月の全国主要港における生鮮サンマ水揚量は前年同月比57%増の9471トンだった。近海の漁場を大型船が早期に獲った8月からの出足の好調に加え、9月下旬に水温が13～14度台へ下がり、魚群が南下し漁獲が続いている。主要な水揚げは北海道・花咲港。10月上旬の主な漁場は花咲港東北東沖の410～550カイリ。花咲港南東沖250～260カイリ付近にも散発的に漁場ができた。10～11日のしけ明け以降は花咲東南東250～花咲東410カイリが主漁場となった。船で1日半程度の場所で、多くの漁船が2～3晩操業している。魚体は26～29センチ、体重80～110グラムが主体で、短めだがある程度の脂がのっており味は良い。昨年は見られた25センチ以下70グラム以下の混じりも少ない。今後の漁場は花咲港から1日程度の場所に移る見込みだが、沿岸に来遊するサンマは極めて少なく、公海が主漁場になると同センターはみる。また、漁期遅くに来遊する沖合は分布が昨年より少なく、漁期全体の合計分布量は昨年並みと推測。資源そのものは依然低調であることに注意している。

豊洲9月輸入生鮮大物

カナダマグロに高評価

(10月17日みなと新聞)

時事通信社が集計した東京・豊洲市場9月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は1127本（前年同月1021本）で前年同月比10%増加した。クロマグロは、ほぼ前年並みだったが、天然ミナミマグロがやや増加した。クロマグロ全体の本数は496本（前年同月483本）で2・7%増。天然物の主力は米ポストンとカナダの北米産で、入荷はともに218本と同数となった。ポストン産（同318本）は減少したが、カナダ産（同115本）は2倍弱に増えた。この他、天然物はオーストラリア産が18本（同8本）とニュージーランド（NZ）産が12本（同12本）あったのみ。養殖物は、ここ数年入荷量が落ちているメキシコ産が30本（同2本）に回復した。昨年、突発的に入荷したトルコ産養殖物はなかった（同24本）。ポストン産は「例年と比べ脂薄」（仲卸業者）との評価から、販売は苦戦。セリ値は、高値はキロ6800円（同7500円）、平均値が4892円（同4917円）と下落した。一方、カナダ産も高値が8500円（同8800円）、平均値は5300円（同5838円）と前年比では下げたが、平均値はポストン産に比べ400円ほど高かった。月を通して脂のり評価は高く、ポストン産と比べた話（もり）傷の少なさも評価の対象となった。「今月はポストンを諦め、完全にカナダに狙い絞った」

(次頁左欄上に続きます)

と話す仲卸もあった。ただし、供給が過剰気味になったことや、大間産など国内物の身質が向上してきたことから、下旬に入りカナダ産人気にも陰りが見え始め、3000円台で売り急がれる場面が見られた。養殖物のメキシコ産は、全数の相場が未発表となった。解体後の歩留まりの悪さが指摘される30キロ前後の小型が多かったが、今年は大手量販店を顧客に持つ買参業者が積極的にセリに参加する姿が見られ、国内養殖物につられて買われる場面があった。実勢価格はキロ2500～2000円とみられる。

ミナミマグロのセリ値伸び悩み ミナミマグロは天然物のみで、全体で585本(前年同月497本)と約18%増加。主力は月を通して安定した入荷がみられた豪産の427本(同387本)で、ケープタウン産も85本(同15本)に増えた。NZ産は73本(同95本)に減少した。セリでは、いずれの産地も伸び悩み、豪産の高値はキロ4700円(同5800円)、平均値は2893円(同3727円)。ケープタウン産も高値は5000円(同5800円)、平均値が3426円(同4058円)と下落した。無頭処理による歩留まりの良さで人気の高いケープタウン産だが、「身色が良いが、臭いが気になる」(仲卸業者)と鮮度低下を指摘する声があったことや、買い気の落ちる月末近くに入荷が集中したことも販売不振の一因となった。NZ産はほぼ全数が不成立で、安値で売り急がれた10本が1000円で発表された。メバチは全体で28本(前年同月41本)と一段と減少。主力の豪産は15本(同16本)と前年並みだったが、ケープタウン産は13本(同24本)に減少した。セリでは、豪産の平均値は2025円(同1831円)と1%上伸。一方、ケープタウン産の平均値は3333円(同2766円)と20%高だったが、上品のみ選択買われたため、約半数にあたる7本がセリ残った。また、豪産のキハダが18本(同入荷な

地中海養殖マグロ 3割増2万5500ト

今期輸入 搬入長期化、在庫消化進む (10月18日みなと新聞)

地中海産養殖冷凍クロマグロフィレーの今期輸入量(2023年12月～24年8月)は前期比29%増の2万5503トンだった。同産の養殖クロマグロは例年12月～5月が搬入シーズンだが、今期は超低温冷蔵庫の庫腹不足などで運搬船の水揚げが遅れ、7月ころまでと長期化した。8月も商社の海外在庫が国内に搬入されたとみられ、異例のシーズンとなった。地中海産がメインとなる養殖クロマグロフィレーは当初の予想を上回る輸入量となった。近年は中国での需要増加で原料価格が高騰し、トロ商材を中心に韓国や日本を經由し搬入されていた。ただ、世界的な物価高で中国経済が停滞し、今期は冷凍商材の買い付けは限定的だった。昨年は買い付けに対して内販価格が低迷し、商社は逆ザヤの商環境だった。国内消費も低迷して冷凍マグロは脂物、赤身とも在庫が滞留したが、「地中海物の在庫消化は進んでいる」と商社。秋以降は地中海産養殖クロマグロでメニューを組む回転寿司も多い。年末に向けて商社は価格を上方修正しているもよう。12月から始まる新物の搬入は、運搬船の操業スケジュールが乱れており昨年よりは減少することも予想される。コンテナを使った搬入も引き続き行われるとみられる。

台湾大バチ750円維持 インド洋一船買い

上品は市場に不足感

(10月18日みなと新聞)

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は10月上旬現在、1本40キロ上の大バチは先月同時期と同じキロ750円で推移している。各サイズとも同月上旬時点では8月から保合い。キハダも同様となっている。東京・豊洲市場の荷動きは「並品、裾物は良くない」と卸。赤身の上品は少なく、高値が付く傾向にあるという。キハダは価格メリットがあり売れは良いものの、年末商戦が近づいている点を懸念材料に挙げた。脂商材となる冷凍のミナミマグロとクロマグロは搬入があるため、卸は「年末に向けて弾はそろってきた」とコメント。国産養殖は背側に不足感があり、地中海養殖は商社側が年内の新物搬入に限られることを踏まえ、売りを絞っているとの見方を示した。超低温で保管する冷凍マグロは依然として庫腹が不足している。卸は末端消化が搬入に追い付いていないことが、相場維持の要因となっている。地中海養殖物が数は減るものの搬入はあるとみられ、年明け以降も天然物の搬入も続く。卸は「操業コストは上がっており船側の経営も苦しい。マグロ産業の維持が危ぶまれる」と指摘する。大バチ以外の一船買い相場は、25キロ上がキロ600円、15キロ上が500円、10キロ上が400円。キハダも25キロ上が600円、15キロ上が500円、10キロ上が400円。

豊洲 生鮮マグロ類月間上場量・相場(輸入、2024年9月)

(単位…数量:本、価格:キロ当たり円)

魚種	産地	サイズ等	当年				前年同月			
			数量	高値	中値	安値	数量	高値	中値	安値
ミナミマグロ	NZ		73	1,000	1,000	1,000	95	5,200	3,875	2,900
	ケープタウン		85	5,000	3,426	2,500	15	5,800	4,058	3,000
	豊州	天然	427	4,700	2,893	2,000	387	5,800	3,727	2,200
クロマグロ	NZ		12	-	-	-	12	4,000	3,333	3,000
	カナダ	天然	218	8,500	5,300	4,300	115	8,800	5,838	4,000
	ボストン	天然	218	6,800	4,892	4,000	318	7,500	4,917	3,700
	メキシコ	養殖	30	-	-	-	2	-	-	-
	豊州	天然	18	4,900	4,050	3,200	8	4,000	3,350	2,700
	スペイン	養殖	-	-	-	-	1	-	-	-
	トルコ	養殖	-	-	-	-	24	2,500	2,500	2,500
アルウェー	養殖	-	-	-	-	3	-	-	-	
メバチ	ケープタウン		13	3,800	3,333	3,000	24	4,000	2,766	2,500
	豊州		15	3,500	2,025	1,500	16	2,600	1,831	1,500
	NZ		-	-	-	-	1	-	-	-
キハダ	豊州		18	-	-	-	-	-	-	-

*中値は卸が発表した成立品の平均。残品や未発表品を含む平均ではない。一本値など相場データが少ない場合は高、中、安値が同値表示
*時季変動あり

**12月末日でタイムズを解約される方は、
11月15日までに組合にご連絡をお願いします。**

(右欄上に続きます)

(次頁左欄上に続きます)

〈豊洲の旬〉生鮮サバ類 秋らしくない、**いまだゴマサバ主体**

(10月21日水産経済新聞)

秋に旬を迎えるマサバは、青森、岩手、宮城を中心に品質は向上しているものの、組成が悪く、水揚数量も僅少。代替として扱われるゴマサバが「比較的、数も品質も安定している」ことから主力として上場されている。東京都中央卸売市場の週間市況によると、一日平均上場数量は20～30トンと、ここ2年と同水準。相場は9月1、4週目に中値キロ500円台の高値傾向となった。卸担当者によると、マサバは「青森、岩手、宮城の定置物が主体」「品質は10月からよくなってきているものの鮮魚サイズが乏しく、特に大型は少ない」と、昨年続き組成の悪さに肩を落とす。仲買や量販店・スーパー、業務筋まで、「10月からマサバの問い合わせは急増した」と、秋商材としての引き合いは健在だが、「提案できる数量が確保できない」と、秋らしくない海の様子を嘆いている。一方で、マサバが枯れる夏場に代替として扱われるゴマサバが、昨年同様に今年も10月にマサバの代替として主力で上場されている。産地は、岩手、宮城で「品質は悪くない」「各サイズ揃っており、水揚げも安定している」ことから、安価ではないものの量販店・スーパー向けに動いている。今後は海水温の低下に伴い、定置含め、本来主体となるまき網物の増加によりマサバの出回りが安定することに期待する。

**〈さかなの動き〉上乾チリメン 不足気味で卸値上昇
大阪本場 盆明けから漁不振**

(10月21日みなど新聞)

大阪市中央卸売市場本場（大阪本場）における10月中旬の上乾チリメンの中心卸値はキロ2500～2200円。前月中旬から400～500円上がった。盆明け以降の水揚げが全国的に振るわず、入荷は上向いていない。卸担当者は「不足気味で相場が上がっている」と話す。水揚げ産地は兵庫（淡路島、神戸）と大阪が中心で、徳島と愛媛は散発的のもよう。入荷産地は主に兵庫で、品質の劣る製品がほとんど。2～3センチの中筋のカタクチにエビやカニ、クラゲ、エソなどの小魚混じりで、カタクチの体色は灰色だという。大阪本場の仲卸の買い付け意欲は、在庫が少ないため低くはない。しかし、品質が劣るため高いともいえない状況だという。ただ、量販店・スーパーは販売を強めており、出荷分に加え、来年春漁が始まるまでの在庫も見据え、買い付ける動きがわずかにあるという。量販店・スーパーは品ぞろえを増やしている。創作チリメンなどの加工業者やホテル、外食産業などの業務筋の引き合いは、国内外の観光客が多いため強い。

今後の相場は強含みの見通し。卸担当者は「全国的に低調な漁模様が当面続く」とし、「11月末あたりには漁が見られるかもしれない」と期待する。

(右欄上に続きます)

ねり8月生産量8カ月連続減**揚げかまは5%増**

(10月21日みなど新聞)

食品需給研究センターが公表した8月のちくわ・かまぼこ類生産量（推計速報値）は前年同月比0.6%減の3万2800トンだった。8カ月連続で前年同月を下回った。主力の揚げかまぼこは5.1%増の1万2000トンと伸びたが、カニ風味かまぼこなどを含む「他かまぼこ」が8%減の9275トンだった。他かまぼこは2カ月ぶりの減少。大台の1万トンを再び割り込んだ。揚げかまぼこは4カ月ぶりに増加した。ちくわは0.5%減の5274トン、板かまぼこは4.5%減の3099トンと、2品目とも2カ月ぶりに減少。なんと・はんぺんは4カ月ぶりに増加し、3.6%増の2477トンだった。包装かまぼこは18.2%増の675トン。

1～8月累計5%減28万トン>>

1～8月累計のちくわ・かまぼこ類生産量は前年同期比5.4%減の28万542トン。全品目とも前年を割っており、特に包装かまぼこが27.3%減、板かまぼこが14%減と、減少幅が大きくなっている。

北海道秋サケ3割減956万尾**10日現在 額は1割増286億円**

(10月21日みなど新聞)

【札幌】北海道連合海区漁業調整委員会によると、10月10日現在の秋サケ沿岸漁獲尾数（速報値）は、累計で前年同期比29%減の956万2242尾、金額は同10%増の286億579万円。漁獲尾数の旬計は、9月上旬（1～10日）43万2218尾（前年同期比58%減）▽9月中旬（11～20日）143万8165尾（同24%減）▽9月下旬（21～30日）462万667尾（同4%減）▽10月上旬（1～10日）494万1575尾（同14%減）。海区別の尾数は、オホーツクが31%減、根室が11%減、えりも以東が25%減、えりも以西が35%減、日本海が41%減。オホーツクの漁獲が全体の7割を占める。9月下旬から10月上旬に漁獲ピークを迎えたものの、前半の出遅れを挽回できず、累計は前年実績を3割下回る。一方、金額は魚価高を反映して前年同期比1割増となった。道漁連の秋サケ水揚げ日報によると、20日現在の累計水揚量は前年同期比25%減の3万4595トンで、重量ベースでも近年最低ペースで推移する

**組合事務所を商談ルームとして利用しませんか。
無料で利用できます。収容人数8名位です。組合まで連絡下さい。**

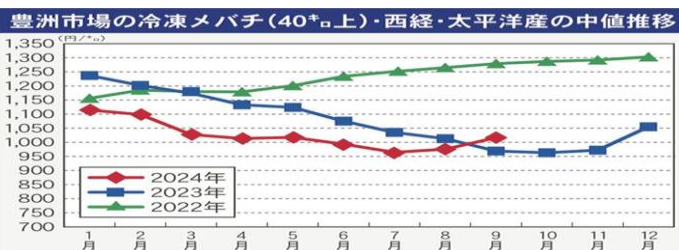
(次頁左欄上に続きます)

マグロ情報 豊洲9月冷バチ良品・ スノ物需要増 4桁相場へ回帰

(10月22日水産経済新聞)

豊洲市場における9月の冷凍大バチ(40キロ上)の上場本数は1万1782本で、前年同月を2%下回った。ただし公表値キロ当たり中値は、西経・太平洋産銘柄が1022円へと上昇し、昨年より3か月早く4ケタ相場に回帰したほか、数量が最も多い大西洋銘柄も前年同月超えの915円(前年同月比4%高)で、相場は上げ基調にある。(グラフ参照) 冷バチ相場は旧盆明けに始まったジリ高が、9月も続いた。西経・太平洋産銘柄は公表値中値の多くが1000円台にあり、3ケタ台であっても950円を上回っている。海外船の一船買い価格(外貨)が7月の下落以降、反発する気配をみせないことで「台湾・中国船の稼働隻数が減るのでは」との思惑から、特にスノ物需要が増えてきた。その一方で冷バチ良品の不足も話題に上がる。つまり冷バチ相場の上昇は、底上げと良品の値上がり効いているため「中間の価格帯が売れているわけではない」と、卸担当者は分析している。課題だった待機船の解消は、9月末時点で残り2隻となった。豪州産の養殖冷凍ミナマグロおよび地中海産の養殖冷凍クロマグロは、運搬船の倉入れを完了したとみられる。ただし超低温冷蔵庫の庫腹は満杯のまま。台湾・中国には、日本市場を狙う冷凍のバチ・キハダ在庫が十二分にあるとも推測されている。大西洋銘柄も年明けの中部海域など脂が薄い産地の荷が消化され、春から夏に品質の上がる南半球のケープタウンやナミビア産の上場が増えてきた。品質に見合った価格形成が進めば、ジリ高が続くと想定される。

塩釜産の生鮮が急減 生鮮は主力の宮城・塩釜産が伸び悩んでいる。クロマグロの入荷本数は237本で、前年同期の513本の半減以下へと急減した。「ひがしもの」でブランド化されたメバチも、塩釜・気仙沼込みの宮城産が121本(62%減)で、前年を大きく下回っている。半面、輸入クロマグロは、カナダ産が218本で前年同月の115本から2倍近くも増えた。米国・ボストン産よりも脂乗りが評価されたが、供給量が多く月後半は国産物の良品が台頭してきたことから、成立品の平均単価は5300円(10%安)にとどまった。



八戸 船凍スルメイカ 過去最高値2万円超 良型需要強く

(10月22日水産経済新聞)

【八戸】八戸魚市場で18日、中型イカ釣り船による今期初の船凍スルメイカの入札が行われ、IQF(一本凍結品)の23~25尾(一箱8キロ入り)に一箱2万1200円が付き、初めて2万円を突破した。週明け21日も同サイズが2万1900円と続伸。過去最高値を更新した。全国的にスルメイカの漁獲が低調なことが背景。特に刺身にも使える高鮮度の船凍品は供給が細っており、漁業情報サービスセンター(JAFIC)の統計によると1~9月の全国主要市場の冷凍スルメイカの水揚げはわずか500トンと、歴史的低水準だった昨年の同期をさらに39%下回っている。現在、大和堆で操業中の中型船の生産ペースは一日一隻当たり100箱未満とスローといい先行きの供給増加も期待しづらい情勢にある。今期はスルメイカの魚体が例年に比べて小ぶりとされていることも、高値の誘因となった。大和堆で生産中の船凍品や、八戸や函館で揚がる生鮮イカを含めて、200グラムアップすら少ないといわれており、一尾当たり300グラムを超える8キロ23~25尾への引き合いが強まった。18~20尾(21日、高値2万1300円)、26~30尾(1万9800円)など、そのほかの大きめサイズも2万円超、もしくはそれに迫る水準となった一方、一尾200グラムから200グラム前半相当の36~40尾は1万2400円と、大きな価格差が生じた。IQF製品はスルメイカの不漁が長引く中、近年顕著に価格水準が上昇。昨年12月に1万8200円(23~25尾)、今年1月に1万8300円(17尾未満)と、過去最高値を塗り替えてきたが、今回は一気に水準が上がった。刺身や寿司、海鮮丼の一品などとして業務筋に仕向けられる見込み。市場関係者は「これだけ高くても、供給量がわずかなので余すことはないのでは」と指摘。今後も引き締まった相場展開を予想している。船凍スルメイカの減産観測が強まる中、同市場で並行して行われている船凍ムラサキイカの相場も強気配となるなど、影響が広がっている。

〈さかなの動き〉カキ 主産地11月以降でそろそろ 広島産、24日豊洲初荷

(10月22日みなと新聞)

カキ主産地の広島のみき身生産が21日に始まった。東京・豊洲市場の初入荷は24日の見通し。瀬戸内、三陸ともに高水温などの影響で成育が遅れており、各地が出そろるのは11月以降になるもよう。豊洲の生むき身の入荷は岩手、三重産が例年通り1日からスタートした。10月前半の荷動きについて、卸筋は「岩手産の品質は例年並み。産地の貝毒検査もあって木曜日に入荷がなく数量がまとまらない。少ない中で欲しい人だけが買い、相場は強め」。一方、宮城県漁協は今期の生食用むき身の初出荷日を28日からと決めた。

(次頁左欄上に続きます)

過去最も遅れた前期と比べ2日早い、直近5年間では2番目に遅い。海水温が平年よりも高めで推移し、身入りやへい死率を懸念する声もある。岡山は11月上旬ごろからの開始。邑久地区は台風の影響で漁場への沖出しが例年より1週間程度遅れたようだ。兵庫は未定。10月下旬に一部で始める可能性がある。韓国産生鮮むき身の輸入は9月後半から開始。国産が少ない10月中の展開を見込む。冷凍カキの1～8月累計の輸入数量は前年同期比22%減の3413トン。平均キロ単価は3%高の1057円(CIF)で過去最高値。

ノルウェーサバさらに存在感 「超高速凍結」で生ネタも

(10月22日みなと新聞)

サンマなどと同様、秋に旬を迎えるはずの国産サバの存在感が、次第に失われつつある。全国各地で水揚げされるものの、小型魚ばかりで不人気。消費の大半はノルウェー産で、今秋からは寿司ネタ用の生サバもお目見えしている。農林水産省のまとめによると、2023年のサバの水揚量は、約26万1000トン。魚の中では、マイワシに次いで多く、同年2万6000トンと少なかったサンマなどに比べ、水揚量は多く順調。今年も9月まで前年並みのペースで漁獲されている。ところが、太平洋と日本海ともに「獲れるサバは200グラム以下の小型魚が主体で脂が少なく、食用には向かない」と漁港関係者は嘆く。多くが養殖魚などの餌に回されたり、外国に輸出されたりしている。これに対し、ノルウェーの日本向けサバ輸出量は、23年が前年比13%増の約6万2000トン(在日ノルウェー大使館水産部調べ)。この他、中国やベトナムを経由する分を含めると、13万～14万トンのノルウェー産が、日本で消費されているとみられている。ノルウェー産のサバも今が旬。同大使館水産部は、日本航空(JAL)グループの商社JALUXと連携し、21年から脂肪率約30%、重量500グラム以上のサバを「サバヌーヴォー」とネーミングして日本へ空輸。秋限定でJAL国内線ファーストクラスの機内食や、都市部の食品専門スーパーなどで販売している。今年からは、アルコールを使った「超高速凍結技術」により、寄生虫であるアニサキスの心配がない生サバの提供も開始。寿司ネタなどでおいしく食べられるため好評となっており、今後もますますノルウェー産が日本でメジャーな存在となりそうだ。(時事)

〈ブリ・カンパチ特集〉消費地動向 豊洲市場 養ブリ 価格前年並みも入荷サイズ小さめ量微減

(10月24日水産経済新聞)

養殖ブリの生産コスト上昇が続く中、東京・豊洲市場の販売価格では昨年秋口をやや上回るキロ当たり1000円をうかがう展開となっている。各地で発生した赤潮や高水温の影響で、サイズは小さめ。

(右欄上に続きます)

入荷サイズは平均で3・5キロ程度で例年よりも0・5キロ程度は小さく「夏場だったら小さくても受け入れられるが、秋口になってからは切身の需要が高まるため、大きいサイズのニーズが強い」と販売の難しさが指摘されている。豊洲の10月上旬までの販売は一尾サイズが小さいため数量は前年並み、金額は単価がやや上回っているため微増といったところ。昨年は、一昨年の高値の反動で秋口から相場は弱い展開が続いた。ただ、生産現場では飼餌料価格、流通価格などの生産コストは上昇しているため、新物に切り替わる夏場から価格上昇を探る動きが本格化。ジリジリと上げてきた。年末に向けては、5キロ近い出荷に期待が寄せられる。サイズの小ささから消化が進めば相場は一段の上げが見込まれるが、一方で大型で脂乗りのよい天然ブリが大量に揚がれば、弱含む可能性も強い。

養カンパチ上げ続く生産コスト増加 養殖のカンパチは中国で斃(へい)死や不漁が伝えられ、稚魚の価格が高かったうえに、国内での養殖でも赤潮などの影響で斃死が多く、在池尾数が減少。ブリと同じくコストが上昇しているうえ、数量が決定的に少なくなり昨年の高値をさらに上回り、豊洲の卸価格でキロ1800円という驚きのレンジに達している。この相場感でも末端がついてくるのは、刺身にした時の色変わりの遅さという特徴が理由。年末の寿司向けなどに強い引き合いがある。ただ、これまでも上がりすぎた結果、末端がついてこれなかったこともあり懸念する声も上がっている。

〈豊洲の旬プラス〉むきカキ 高水温で成育不振 本格化は11月

(10月22日水産経済新聞)

高水温で成育不振、本格化は11月むきカキ(写真はイメージ)は、例年であれば10月1日から岩手、宮城、広島から入荷する。しかし、今年は全国的な成育不良などの影響から、10月前半の入荷は岩手など一部地域に限られた。卸担当者によると、広島の初荷が24日、宮城が29日を予定している。岡山は11月以降になる想定だ。

現在入荷している岩手については、大サイズの上値がキロ6000円で、初荷のみならず17日現在まで5000円超えを継続する異例な展開をみせている。品質については「身入りはまだ悪い」ことから“ない物需要”による相場だという。

(次頁左欄上に続きます)

豊洲市場でセリが始まる10月1日から複数産地がまとまらなかった理由については、「高水温」という回答が最も多かった。本来であれば夏から秋に卵が抜けて身が太り出すが、ここ数年は海水温が下がる時期がズレ込んでいることから、「10月でも全国的に卵持ちが多い」状況。カキの卵はクリーム色をしており、「生食でも加熱でも食感、味が悪い」「パックにすると水が白く濁る」と、好まれない理由を説明した。そのほかの理由として、「10月になっても気温が高く、鍋商材としての需要がいま一つ」「生産者、むき手不足」とし、広島については、「カキ殻集積場で処分するカキ殻が滞留している」ことも、10月1日の解禁を見送った理由として挙げた。今後の身入りにについては、主力産地の初荷の状態次第だが、現段階では「昨年と比較すると、斃(へい)死はまだ少ない想定」なのは好材料。そのほかでは、中国禁輸前まで活発に行われていた輸出が緩和決定により影響してくるかに注目だ。

流通3団体統計 9月は 水産部門1.8%増

(10月24日水産経済新聞)

食品スーパー(SM)が主体の流通3団体が22日に発表した「スーパーマーケット販売統計調査」2024年9月実績(速報)によると、総売上高は、前年同月比2.1%増(既存店ベース)の1兆361億4885万円となった。前年超えは19か月連続。休日が1日少なく、残暑により季節商材の動きは鈍かったが、生鮮3品の相場高が全体を押し上げた。最大の構成比を占める生鮮3部門の合計は、3569億1936万円(2.5%増)だった。猛暑や天候不順によって相場高が続く青果(3.8%増)の伸びが目立ったほか、水産(1.8%増)、畜産(1.3%増)もプラスを維持した。水産の売上高は、861億1430万円。季節物では、秋サケが不漁の一方、サンマは水揚げがまとまり前年実績を大幅に上回った。ほかの近海物はカツオとブリ以外は依然低調。日持ちする商材ではシラス、チリメンに回復の兆しがあるものの、相場高が顕著なカニ・エビをはじめとした冷凍品や魚卵の動きは鈍かった。

(右欄上に続きます)

北海道秋サケ最低4万ト割れも 産地高騰

(10月24日水産経済新聞)

北海道の秋サケ漁が振るいません。道漁連の日報によると、21日現在の累計漁獲量は前年同期比23%減の3万5612トン。残る漁期は40日で、最終的な漁獲量は4万トンを下回り、過去最低となる可能性も出てきました。今年の研究機関の来遊予測(沿岸と河川捕獲の合計)は前年比25%減の1703万尾。過去最低の2017年(1737万尾)を下回る厳しい予測でした。今年序盤から水揚げが伸びず、9月中旬まで前年比4~5割減で推移。9月23日に日量3000トンを超えて盛漁期に入り、一時は前年同期の9割まで戻しました。しかしそれ以降、10月上旬まで多い日で日量1000トン前後、休漁明けの月曜で2000トン前後が精いっぱいピークとしては物足りず、中旬以降はしけによる休漁もあって挽回は難しい情勢にあります。主力海区は11月末までに終漁します。10月15日から11月末までの漁獲量は、昨年(最終5万3000トン)は約7000トン。漁獲量が4万トン台後半だった19~21年の不漁期は4000~5000トン程度にとどまっておらず、同程度の加算、現状のペースでは最終的な漁獲量が4万トン前後となる可能性が出てきました。漁獲量のこれまでの最低は1978年の4万4019トン。

不漁で産地市況は高騰しています。10月中旬の大相場は、雌B品でキロ1800~1600円、雄の銀毛で900~600円で、雄雌とも前年同期より5~6割高水準にあります。生鮮市況は、生スジコで前年同期比6割前後高のキロ9000~8000円台中心。生フィレーで4~5割高のキロ1400~1300円中心となっており、一部出回り始めている新物のしょうゆイクラ、冷凍ドレスなど製品の高騰も避けられない情勢となっています。一方、終盤となっている今年ロシア太平洋サケ・マス漁は不漁年にあたるカラフトマスに加え、シロサケの漁獲も不振です。北洋開発協会(北海道機船漁業協同組合連合会内)のリポートによると、10月20日までのシロサケ累計漁獲量は5万2200トンで勧告(予測)量8万8000トンの6割にとどまり、前年同期比では3割減でした。このうち、北海道に隣接するサハリン州の漁獲は1万6960トンで半減。

(次頁左欄上に続きます)

サケ・マス漁獲総量は15日現在、23万2000トンで予測量32万トンに達せず、23年の60万9000トンの豊漁から一転、30万トン割れの可能性もあります。漁獲総量を左右するカラフトマスが13万6000トンで予測量19万2900トンの7割にとどまっています。漁獲量の低迷が既にサケ・マス魚卵製品の卸売価格上昇となつて反映され始めています。サケ・マス魚卵製品の出来高は昨年の2万5000トンに対し、今年は1万~1万1000トン程度になると予想されています。北洋開発協会によると、上旬のロシア極東地方でのカラフトマス卵製品の卸売業者への引き渡し価格はキロ6500~5500ルーブル、シロサケの卵製品は7500~6500ルーブルで、卸売業者による価格は9月末に8000ルーブルの声も聞かれています。ロシア国内の魚卵消費量は1万5000トンと評価され、前年の漁獲製品の在庫を考慮すると、需要を補うことが可能とみられるが、価格は年末年始に向けさらに上昇すると同国専門家は予想しています。

集客狙い「値下げ」相次ぐ 小売・外食、競争激化

(10月24日みなと新聞)

長引く物価高で節約志向を強める消費者を引き付けようと、小売や外食チェーンで、あえて値下げに踏み切る動きが相次いでいる。実質賃金の低迷で支出の選別が進み、旅行や「ハレの日」には出費を惜しまない一方、日常生活では切り詰める消費行動の二極化が鮮明になっているためだ。各社は生産や物流の効率化を徹底、「安さ」の追求に必死となっている。イオンは22日、プライベートブランド「トップバリュ」シリーズの食品や日用品など約100品目について、販売数量限定で増量する実質値下げを発表した。イオントップバリュの土谷美津子社長は「(客は) 価格に非常に厳しくなっている。同じものなら安い方を求めてお店をはしごしている」と指摘。11月中旬には一部商品の値下げもし、集客力を高めて売り上げを伸ばしたい考えだ。ホームセンター大手カインズも同日、洗剤や生理用品など107品目の価格を23日から12月2日まで引き下げると発表。デジタル化の推進によるコスト削減などで、今後も継続的に価格を見直すという。外食では、大手牛丼チェーン3社が今月、並盛りが300円台になるキャンペーンを期間限定で実施した。

(右欄上に続きます)

吉野家は100円引きし、すき家は80円、松屋は50円引くクーポンを配布。一斉値下げは話題を呼び、各社とも客数の底上げにつながったという。顧客争奪の価格競争は今後も激しさを増しそうだ。
(時事)

9月GMS水産既存店3%増収

残暑でウナギ好調、秋サケは動き鈍く (10月24日みなと新聞)

総合スーパー(GMS)や食品スーパー(SM)の業界団体は23日までに9月の売上高を発表した。水産品既存店売上高は前年同月比1.8~2.6%の増収。サンマやブリ、ウナギなどの動きが良かった。日本チェーンストア協会(速報値、消費税含まず)の9月における水産品売上高は既存店ベースで2.6%増だった。刺身やマグロ、ブリ、生カツオの動きが良かった。マアジやサンマ、カレイも順調。ウナギや塩サケなども好調に推移した。また、同会は「節約志向もあり、冷凍魚や漬け魚も良かった」と話した。一方で「不漁の生秋サケや魚卵の動きが鈍かった」とも指摘した。その他、タコやカニ・エビ、アサリなども苦戦した。3月末に同会の会員企業が8社退会。現在の統計は前年度と比べ、マックスバリュ関東が加わり、イオン北海道とダイエー、マックスバリュ東海、いなげや、キャンドゥが外れた状態にある。全店ベースでは7.4%減の587億2698万円だった。惣菜は既存店ベースで3%増だった。全店ベースでは6.3%減の100億1505万円になった。米飯、寿司の動きは良かった。温惣菜は天ぷらや焼き物などが好調だった一方、中華の動きは鈍かった。要冷蔵惣菜は和洋ともまずまずの動きだった。農産品や畜産品も除くその他食品のうち、冷凍食品や缶詰、ノリなどの動きが好調だった。食料品部門ではなく、住関品部門である医薬・化粧品のうち、健康食品などの動きが鈍かった。同会は「健康食品全体が不信感を持たれてしまっている」と振り返った。9月末時点の企業数は47社、対象店舗数は9301店舗だった。

SMは2%増 サンマ伸びる SM3団体が発表した販売統計調査によると、9月の水産品売上高(速報値、税抜き)は既存店ベースで1.8%増になった。全店ベースは3.1%増の861億1430万円に上った。旬のサンマが「前年に比べ豊漁」(SM3団体)で売り上げが大きく伸びた。

(次頁左欄上に続きます)

刺身類やカツオ、ブリは好調。残暑の影響でウナギも良かった。シラスなどのチリメン類の回復傾向も続いた。一方、秋サケは不漁で苦戦した。カツオやブリ以外の生魚は不漁による入荷不足の指摘も。カニやエビなどの冷凍水産品、魚卵は価格高騰で苦戦が続いているという。惣菜は既存店ベースで2・8%増となった。全店ベースで4・2%増の1170億2560万円だった。米飯類が特に好調。残暑で自宅での調理を敬遠する傾向が続き、揚げ物類や涼味系惣菜が良かった。また、季節感を演出する商品開発の強化を実施している店舗で成果を上げたとのコメントもあったという。3連休が前年より1回多く行楽、イベント需要が堅調だったため、中華惣菜やインスタアベーカーが好調とする意見も多かった。日配は既存店ベースで0・1%減となった。SM3団体は「ねり物やおでん商材などが動かなかったことが要因」と指摘する。ホット商材や和日配の動きが鈍かった一方、アイス・氷菓や涼味麺といった夏物商材の販売が順調だった。冷凍食品は好調が続いた。統計は全国スーパーマーケット協会、日本スーパーマーケット協会、オール日本スーパーマーケット協会の3団体が集計する。9月の調査対象企業数は270社、店舗数は8389店舗だった。

〈豊洲の鮮〉10月24日入荷 高水温とシケで振り回される入荷 (10月25日水産部門新聞)

9月後半から太平洋側を中心にシケが頻発し、大衆魚の入荷は低調だった。入荷が多かったのはブリ・ワラサで、先週から急激に増加している。そのほか、旬の秋サケ、シシャモは低調、マツブがまとまり軟化など、高水温による不安定な入荷に振り回されている。

☆**ブリ・ワラサ**北海道・噴火湾で先週、一日200トンを超える水揚げがあり、ここ数年で経験のない数量だと担当者を驚かせた。サイズは1~10キロと各サイズ揃っており、脂もしっかり乗っている。この時期定番で入荷する羅臼もさらに脂乗りがよいと高値で販売、積丹からも入荷があったことで各地相場は急落している。

☆**ツブ貝**10月に刺網物が入荷するマツブは、北海道・厚岸から入荷。水揚げがまとまったことで、昨年よりも安価で販売する。春物のかご物よりも生きがよいことから業務向けに重宝されている。

(右欄上に続きます)

☆**秋サケフィレー、筋子**産地で選別をかけていることから、セリ場には並ばないものの、産地では身色がレッドの魚が減り、成熟が進んだことを示すピンク、ホワイトが例年通りに増加してきた。相場も下がらずフィレーでキロ1300~1400円。筋子は9500円に高騰した。入荷は11月2週目までを想定する。

☆**むきカキ**高水温で遅れていた広島が本日から入荷するも、産地優先なことから上場したサイズは小粒中心だった。相場も下がらず、依然として岩手で高値7000円、広島も3000円に付いた。29日に入荷する宮城物に期待する。

☆**シシャモ**10月に入荷のあるシシャモは、北海道・鵠川が今年も休漁に。上場したのは厚岸や白糠、広尾、大樹、庶野で、夏場に高水温で稚魚が死んだことから、生き残れた大型のみだった。各地、水揚げが低調なことから昨年以上の高値で取引している。鮮魚出荷は11月頭までを予定する。

東京鮭鱈9月 高値で販売数落とす 冷ギン上限の1200円超え (10月25日水産部門新聞)

東京都中央卸売市場9月のサケ・マス販売は、一般的な高値により販売数量は総じて減少した。販売量の減速は8月をしのぐもので、8月には高値でも前年を上回っていた冷凍ギンも、9月は減少を顕著にした。

空輸は前年並み【生鮮】全体の販売量は合計763トン、平均単価はキロ1940円で、前年同月に比べて単価が20・3%高くなったことが影響し、販売量は一気に16・8%も減少した。主力の輸入(空輸)は254トン、2369円とほぼ前年並みをキープしたが、9月から新漁入りした秋サケの上場が例年より少なく、シロザケの扱いが前年よりちょうど100トン減った。売価は1701円に高騰し、販売量は25・1%の減少で、シロの落ち込みが生鮮全体の足を引っ張る形となった。すでにシーズンを終えた国産養ギンは27トンに減少し、売価は1688円の高値。昨年の販売量が少なかったため3倍近い増加となったが、販売量の27トンは近年の平均並みの水準。うち宮城県産は21トン、1697円だった。

(次頁左欄上に続きます)

【**冷凍**】全体の単価が11・2%高の1318円に上昇したことで、販売量は7・1%減と減速を強めた。全体の平均単価が1300円を超えるのは2年ぶりで、主力のギン以外が軒並み極端な高値を追っている。うちチリ産主体のギンザケは863トン、1217円で、前年同月より12・8%高く、販売量は7・5%落ち込んだ。ギンは8月の1225円より小幅に軟化したにもかかわらず、販売数は8月の1057トンから2割近く減少し、1200円に乗せた段階で減速を強めた。ギンが1200円台で推移するのは2年ぶりだが、これまでの最高値は2022年8月の1266円で、この年は11月まで1200円前半で推移し、12月に1100円を割り込んだものの昨年1年間は1100円前後で推移した。結局1000円を下回ることなく今日につながっている。

【**塩蔵**】全体で499トン、平均1312円で、単価が前年同月を8・5%上回ったことで、販売量は7・6%減少した。主力のギンは高値横ばいで、昨年より100円以上高い1286円となり、8月まで何とか維持できていた数量は8・7%減と顕著に減少。逆にベニは小高くなったにもかかわらず、数量で3割増と健闘した。秋サケ(新巻)は新物時期だが入荷が半減し、昨年の1割高となった。

平均単価は1割以上安く、このため販売量も2割以上増えて好調だったが、暮れに向かってどこまで高値が受け入れられるようになるかが焦点になりそうだ。

【**スケコ**】売価がこれまでの1800円前後から1900円超へとワンランク上昇したことで、販売量は一気に25・0%減の75トンとますます低下している。

月間販売量は今年いまだ100トンを超えた月がなく、単価も1700円前半が下値の抵抗線で、昨年まで散見された1600円前後は姿を消している。

【**明太子**】逆に明太子は若干の2000円割れで、前年同月より6・6%安くなって販売数量はわずかに増加。1～9月では前年並みの単価で、販売量も微増を維持している。

【**塩カズノコ**】10月以降の本格商戦を控えて9月の売れ行きはぱっとせず、単価安にもかかわらず販売量は半減以下にとどまった。9月までの累計では、ほぼ前年並みの単価にして扱い量は2割近く低下しており、これまでのところ荷動きは活発化していないようだ。

【**味付カズノコ**】製造コストの上昇が売価に転嫁されているためか、9月の単価は7月に続いて再び5000円を大きく超えた。販売量はわずか3トンなので、まだ平月並みの扱いにとどまった。

東京魚卵9月 増減高安まちまち スケコ、カズノコ減少

(10月25日水産部門新聞)

東京都中央卸売市場9月の塩蔵魚卵販売は、筋子と塩カズノコが値下がりしても数量を伸ばせなかったほか、全体的にまちまちの動きとなった。

【**筋子**】供給量の低下で近年扱いを落とす一方だが、北米新物時期を迎えても集荷が付かず、9月は前年同月の半分以下となる24トンの販売にとどまった。にもかかわらず販売単価は前年同月に届かず、キロ3481円は2・7%安。ただ、8月までは3000円以下だったので、昨年同様新物に切り替わって3500円近くまで急伸した。

【**イクラ**】販売数量74トン、平均単価の6728円はともに前年同月並みだったが、昨年はここから暮れに向かってジリ安をたどったのに対して、今年は秋サケ漁の不振や輸入鮭卵の減産高値で、今後は製品価格の値上がりへと様変わりしそうだ。1～9月累計では、単価の下方修正と人流の回復に伴い、

(右欄上に続きます)

〈寿司特集〉家計調査分析 外食微増どまり 持ち帰りにメリハリ

(10月17日水産部門新聞)

総務省が毎月発表している家計支出(家計調査報告、2人以上の世帯)によると、2024年の「すし(外食)」の品目名で集計されている外食の寿司に対する支出金額は、1～8月の累計で一世帯当たり1万611円(前年同期比1%増)と微増で推移している。新型コロナウイルス禍の直接的な影響が消失していく中で、外食の寿司はおおむね前年を上回り続けてきた。しかしながら、23年10月に15か月連続での前年超えがストップ。その後しばらくは一進一退で、仕入れ原価や現場経費の高騰によって提供価格の値上げがあった割には伸びを欠く月が続き、24年の途中段階でみるとわずかに前年を上回るにとどまった。1～8月の時点で23年との差はわずかに90円。今後の動向次第では4年ぶりに前年を割ることになりそうだ。

(次頁左欄上に続きます)

とはいえ、コロナ禍前の19年(1万180円)については依然として4%上回っており、市場規模のトレンドとしては伸びているといえる。価格の感度が高くなっている消費者をいかに多く呼び込めるかがカギになりそうだ。

初の月間1700円 一方「すし(弁当)」の品目名で集計されている持ち帰り寿司は、1~8月累計で1万584円(2%増)と、同期間の外食の寿司に比べて伸びが大きくなった。爆発的といえる勢いはないが緩やかに拡大基調にある。水産部門における業績改善の“切り札”で持ち帰り寿司の拡販強化施策が小売業界のトレンドとして続いていることに加えて、値上げのあった外食からの逃避も持ち帰り寿司にプラスに働いた。ただ、目立ったイベントのない平月は前年同月を下回るか、上回ったとしてもわずかという状況がみられ、ここにきて頭打ちの傾向がみられる。イベント月で、恵方巻商戦のある2月は単月で初の1700円超えとなる1717円(2%増)、盆商戦のある8月は1521円(7%増)と、寿司に回す支出についてタイミングを計っているようだ。小売業界で指摘されているメリハリ消費が、持ち帰り寿司の消費にも如実に表れていて、今後はこうした傾向に対応した商品や売場づくりがますます重要になってきそうだ。